

書 評

会田 弘継 著

『追跡・アメリカの思想家たち』

評者 西川 賢

本書は、現代アメリカにおける11人の政治思想家の生涯とその思想内容を解説したものである。

その11人とは、ラッセル・カーク、ノーマン・ポドレッツ、J・グresham・メイチェン、リチャード・ウィーバー、レオ・シュトラウス、H・L・メンケン、ジョン・ロールズ、ロバート・ノジック、ロバート・ニスベット、ウィリアム・バックリー、フランシス・フクヤマである。この顔触れをみてもわかるように、本書では保守にカテゴライズされる思想家に関する記述に多くのページが割かれている。無論、ジョン・ロールズやロバート・ノジックなど、保守に分類されない思想家についても言及がなされているが、久保文明教授も指摘するように、全体の力点は明らかに保守の側にある。ゆえに、本書はむしろ「アメリカ保守思想の諸相と題した方が内容と合致する」と言えよう⁽¹⁾。

本書の最大の貢献は、これまでわが国に十分な紹介や理解がなかったアメリカの保守思想家について、はじめて本格的な紹介と解説を行なった点であろう。一例を挙げると、第四章で取り上げられているリチャード・ウィーバーと南部農本主義について、日本では管見の限りこれまで本格的に言及した書物はなかったように思われる。第六章で取り上げられているH・L・メンケンに関しても、同様である。さらに、第三章で取り上げられているJ・グresham・メイチェンの著作のいくつかは1930年代前半には早くも邦訳・紹介されており、驚くべきことに今なお読みつがれている。ただし、わが国においてメイチェンと言えば、神学者としてしか理解されてこなかった。本書のように、メイチェンを経てジェリー・フォルウェルやピリー・グラハムなど現代キリスト教保守勢力に至る思想的系譜を指摘する論者はこれまで皆無であったと言える。

特に評者は個人的に、著者がアメリカにおける保守主義を単なる反動や復古運動ではなく、現実に新たな変革を生み出していくダイナミズムとして捉える視角を有していることに強い興味をもち、またこの点を非常に重要であると感じたので、若干詳細な補足をしておきたい。

*

アメリカにおいては、政治全体を形作る諸制度や政治組織の総体、すなわち「政体」(Polity)のあり方に影響を及ぼすようなミクロ・レベルでの変化が常時発生していると考えられている⁽²⁾。換言すれば、現実のアメリカ政治のなかでは個別具体的な制度、政策、ないし組織レベルでの変化が数多く「併発」(intercurrence)し⁽³⁾、それらが相乗的に作用したり、あるいは時

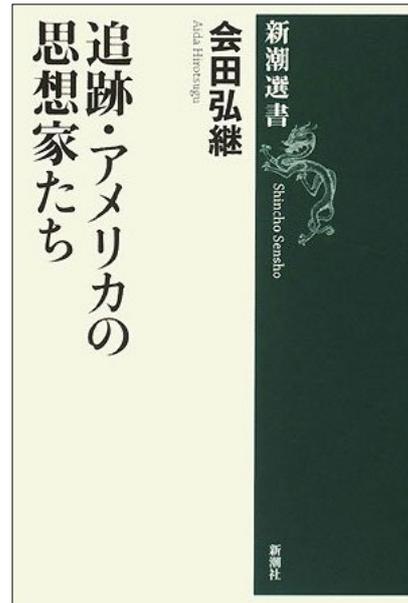
として拮抗しあうことでアメリカ政治の総体的なあり方を決定付けていると考えられているのである⁽⁴⁾。

では、近年のアメリカにおいてマクロ・レヴェルでどのような政治的变化が発生しつつあるのか。さらに、制度、政策、あるいは組織レヴェルでの個別的变化はマクロ・レヴェルでの変化にどのような影響を与えているのか。これらの疑問に対するヒントを与えてくれるのが、シダ・スコッチポルとポール・ピアソン、ドナルド・クリッチロー、ブルース・シュルマンとジュリアン・ゼリザー、ブライアン・グレンとスティーヴン・テレスなど数多くの政治学者・歴史学者が最近相次いで発表した研究成果の数々である⁽⁵⁾。これら論者に共通する見方は、過去数十年にわたって起きたアメリカ政治の長期的な構造変容を考えるにあたって、保守運動がマクロ・レヴェルの政治的变化に与えた影響を見逃すことはできないというものである⁽⁶⁾。

例えばスコッチポルとピアソンは『アメリカ政治の変容』(注5)において、現代アメリカに生じている構造的変化は「介入的政府に対抗して行なわれた保守勢力による政治動員が生み出すダイナミズム」によって引き起こされたとする見方を提起している。ここでスコッチポルが介入的国家 (Activist Government) と呼ぶものは、福祉制度の導入と定着のプロセスである。すなわち、アメリカにおける福祉制度は1930年代に生まれ、1960年代までにはアメリカの政治体制に定着し、その後も持続していった。しかし1970年代以降になると、そのような「大きな政府」を解体しようと企図するアクターが、市民を積極的に動員することを通じてアメリカの政治体制の変革を目指しはじめた⁽⁷⁾。その結果、環境保護規制への反対、スクール・ヴァウチャーを用いた公教育改革、あるいはワーク・フェア (就業義務付雇用手当支給制度) による福祉改革や労働組合の権限を制限する労働権 (Right-to-Work) 運動、減税運動、銃所持規制反対運動や同性結婚反対運動など、一連の保守的な運動が生み出され、それはアメリカの政治を文字どおり「保守的に変革」していったのである⁽⁸⁾。

「保守を標榜するものが現実を変革する」というと、いささか逆説的にも聞こえるが、特に1970年代以降のアメリカにおける保守主義について考える際には、それがアメリカ政治に新しい変革を生み出すダイナミズムの役割を果たしたとみる視点をもつことも重要であろう⁽⁹⁾。しかしながら、そのような見方が少なくとも日本人の間で共有されているとは言い難い。むしろ、日本人にはアメリカの保守主義について、とかく偏った見方をするものが多いように思われてならない。

日本では一般的に、ことに戦後アメリカにおける保守主義というと、典型的にはキリスト教の教義や聖書を固く信じ、文化的伝統と宗教的伝統を墨守しようとするキリスト教保守、あるいは政府が国民生活へ恒常的に介入する、いわゆる福祉国家ならびにそれを正当化する思想や



新潮社、2008年9月
四六判変型・223ページ
定価1155円

運動に対する反動としての新自由主義を想起しがちである⁽¹⁰⁾。このような理解に立つ人々が念頭に置くのは、「大きな政府」を批判し、政府権力の縮小を主張するハイエクやフリードマンなどの思想家であり、政治家で言えばロナルド・レーガン、あるいは有名なキリスト教の伝道師といった人々である。しかし、アメリカの保守主義を文化的伝統や宗教的伝統を墨守し、変革を拒否する運動、または福祉国家を否定し、「小さな政府」を教条的に追求する単なる反動的運動としてのみ捉える見方はあまりに一面的と言わねばならない⁽¹¹⁾。

あるいは「ネオコン」(新保守主義)という言葉が独り歩きしすぎてしまったことも手伝ってか、アメリカの保守主義とは、「自らの軍事力を妄信した好戦的で、自由や民主主義といった価値観を世界に広めるといふ独善的な使命感をもったタカ派の外交思想」のことであるといふ印象論で片付けてしまう日本人も多い。このような見方をする人々が想定するのは、典型的にはリチャード・パールやポール・ウォルフォウィッツなど、G・W・ブッシュ前政権の高官であろう。砂田一郎教授も指摘するように、このような見方の背後にはブッシュ前政権の外交政策やイラク戦争に対する強い忌避感に由来する反米感情が存在する⁽¹²⁾。

だが、われわれがなすべきことは、アメリカの保守主義に対して紋切り型の視点から一方的な判断を下すことではなく、できる限り対象を多様な角度から捉え、分析することではないだろうか。その意味において、本書はともすれば一面的に捉えられがちなアメリカの保守主義について、それを新たな変革を生み出していくダイナミズムという側面から捉え直したうえで描き出すことに成功した希少な例であると言えよう。

*

最後に、これまで十分な紹介や理解がなかったアメリカの保守思想家について紹介と解説を行なった点は画期的であり、知的刺激に富む本書であるが、あえて評者が気づいた問題点を2点指摘したい。

第一に、本の構成という点からみれば、ロールズやノジックに紙幅を費やすよりは、メイチェンのように邦訳があるとはいえ日本人にとって馴染みの薄いアメリカの保守思想家の紹介に徹したほうが、本書の趣旨により合致したのではないかという感もないではない。例えば、アイン・ランドやガートルード・ヒメルファーフなど、わが国に十分な紹介がされていない保守思想家はまだ存在する。それら思想家についてもメイチェン同様に本書で紹介があれば、と思うのは望蜀というものであろうか。

第二に、著者が一部の研究対象に近接しすぎたがゆえに、その思想家の主張に共振してしまっているという点も若干問題があるように思われる。例えば、ラッセル・カークを扱った章では、著者のカークに対する強い思い入れを感じた。本文中にもあるように、著者はカーク夫妻と長年にわたって深い交誼を結んできた。それゆえ、本書におけるカークの思想や彼の人となりに関する記述はカーク本人との交流なくしては知りえない、まさに生きた知識である。例えば、カークが日本の保守に大きな関心を抱いていたこと、小泉八雲や夏目漱石などの日本人作家の愛読者であったことなどは、会田氏でなければ指摘できない事実であろう。

しかし、たとえどれほど個人的に親しい思想家であろうとも、その人物の思想に内在する欠点や危険性に目を瞑ることなくあえて批判を加え、あるいは疑問を呈する姿勢も時には必要な

のではないだろうか。このように本書には対象との距離のとり方にやや難があると思われる箇所も見受けられる。

以上、瑣末な批判も述べたが、本書はアメリカの現代政治思想をより正確に、そして偏りなく理解するうえで必読の一冊である。本書を契機として、日本人の間でアメリカの政治思想全般に対する理解が深まると同時に、有益な論争が交わされることを期待したい。

- (1) 久保文明「書評：『追跡・アメリカの思想家たち』」『朝日新聞』11月9日（<http://book.asahi.com/review/TKY200811110115.html>、2009年3月28日アクセス）
- (2) Richard Lieberman, “Ideas, Institution, and Political Order: Explaining Political Order,” *American Political Science Review*, Vol. 96, No. 4 (2000) pp. 697–712; Morton Keller, *America’s Three Regimes: A New Political History*, Oxford: Oxford University Press, 2007, pp. 1–3.
- (3) 伊藤正次「『新しい制度史』と日本行政研究 その視座と可能性」『都立大学法学会雑誌』第47巻第1号（2006年）1 20ページ。
- (4) Bryan J. Glenn, “The Two Schools of American Political Development,” *Political Studies Review*, Vol. 2, No. 2 (2004) pp. 153–165; Karen Orren and Stephen Skowronek, “Regimes and Regime Building in American Government: A Review of the Literature on the 1940s,” *Political Science Quarterly*, Vol. 113 (1999) pp. 689–702.
- (5) Theda Skocpol and Paul Pierson (eds.) *The Transformation of American Politics: Activist Government and the Rise of Conservatism*, Princeton: Princeton University Press, 2007; Donald T. Critchlow, *The Conservative Ascendancy: How GOP Right made Political History*, Cambridge: Harvard University Press, 2007; Bruce J. Schulman and Julian E. Zelizer (eds.) *Rightward Bound: Making America Conservative in the 1970s*, Boston: Harvard University Press, 2008; Brian J. Glenn and Steven M. Teles (eds.) *Conservatism and American Political Development*, Oxford: Oxford University Press, 2009.
- (6) Glenn and Teles (eds.) *Conservatism and American Political Development*, pp. 4–14.
- (7) Skocpol and Pierson (eds.) *The Transformation of American Politics*, pp. 3–16.
- (8) 久保文明「アメリカの政党制」、城山英明・大串和雄編『政治空間の変容と政策革新1 政策革新の理論』、東京大学出版会、2008年、225–247ページ、宮田智之「州レベルにおける保守系シンクタンクの台頭とその政治的役割」『法学政治学論究』第63号（2006年）165–197ページ。
- (9) John Micklethwait and Adrian Wooldridge, *The Right Nation: Conservative Power in America*, New York: The Penguin Press, 2004, p. 5.
- (10) アメリカにおける保守主義の分類について、佐々木毅『現代アメリカの保守主義』（岩波同時代ライブラリー、1993年）13–31ページを参照。
- (11) Critchlow, *The Conservative Ascendancy*, pp. 1–5.
- (12) 砂田一郎「書評」『国際問題』第531号（2004年6月）64ページ。

にしかわ・まさる 日本国際問題研究所研究員
nishikawa@jiia.or.jp